“MY TOWN”うぉっちんぐ

歩き目デス&足ラテス

Vol.83

学び舎、はじめて物語

岡崎　直司
タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー

そもそも学校と呼べるものが出現したのはいつ頃からだろう。室町期の足利学校（国史跡・日本遺産）や江戸期の岡山藩閑谷（しずたに）学校（国史跡・国宝）など、名称としての学校は古くから使われているが、教育制度としての「学校」が整うのはやはり近代になってから。その辺りの学び舎の変遷史、愛媛事情を県内で拾ってみよう。

江戸期の伊予八藩にはそれぞれ藩校があり、現存する代表例では松山藩校として文政十一（1828）年に設立の明教館がある。近代となって明治三年、県内他藩に先駆けて洋典科が設けられ、英学校の設置をみた事は着目に値する。同十一年には松山中学となり、しばらくして正岡子規も入学、その後はそうした有為の人材を多数輩出することとなり講堂内には彼らの肖像画がその三方に掛けられていて圧巻。

明教館内部、支輪天井がその格式を物語る

この建物は昭和十二年に現在地へ移築されたが、同二十年の数度にわたる松山空襲を考えると、このジャンルの遺構としてよくぞ残ったと言わねばならない。

さて、江戸期で現存する学び舎には、幕末期にひと際光芒を放った建物が大洲にある八幡神社の私塾古学堂である。主宰する神官常磐井巖戈（いかしほこ）、彼と義兄弟の契りを結ぶ国学者矢野玄道、または天才語学者三瀬諸淵、悲運の志士巣内式部、岩倉具視の懐刀となる香渡晋（こうどすすむ）、後に五稜郭の設計者となる武田斐三郎、三輪田米山（書家）・元綱（勤皇家）兄弟などなど、枚挙にいとまがない。何れもこの小さき学び舎から巣立ち、幕末から明治にかけての激動期に異彩を放つ活躍をしている。容れ物の大きさと中身の教育は関係ないのだろう、それよりも大事なのは教える側と学ぶ側の真剣度であり、そうした時代の持つ熱なのかも知れない。藩校とは違って身分を問わないその受け入れもあって、建物の土台となる石垣に棒杭を刺して足掛かりとし、出格子に掴まって受講する者が居たほどの人気があったらしい。一人でこの建物を守っておられた常磐井忠香氏から、平

古学堂、手前が書庫

申義堂

成の初め頃に伺った話でもある。

明治二年に建ったと伝わる卯之町・申義堂を見てみよう。こちらも地域の人々の肝いりによって出来た私塾。元々は現在地の東方２００ｍくらい、坪ケ谷にあった大師堂で漢学者左氏珠山が教えていたが、宇和島藩校明倫館に出仕する事となり、新しい指導者を迎えるべく近くに新築されたのがこの建物。その人物は珠山の師上甲振洋という当時著名な八幡浜の儒学者。日振島の代官をしていた事があり号を振洋としている。郷党有志で建てた申義堂は住宅兼用の実に素朴なもの。それでも、きっとお迎えするに当たり失礼の無いよう誠を尽くしたであろうことが、その佇まいから見て取れる。同五年にはいよいよ近代教育としての学制発布となり、この建物はそのまま新時代の学び舎として開明学校と名を変えて使用される。国民皆学を目指したこの「必ず邑に不学の戸なく、家に不学の人無からしめんことを期す」という文言には、当時の近代国家を作り上げようとする教育への熱気が伝わり、開明の新校名にもまさにその意気が反映された格好である。

開明学校

それにしても、余談ながら不思議な因縁を感じるのは、この開明学校の基となった申義堂生みの親である左氏珠山が、後の明治中期には冒頭の松山中学の漢文教師となり、そこに赴任してきた夏目漱石によってやがて小説「坊ちゃん」にモデルとして登場するのだから人生は分からない。

そうしてやがて手狭になり、同十五年末に新築されたのが現在国重文となっている開明学校である。外観は白壁漆喰の寄棟二階建て、棟梁は三崎大工の都築熊吉。見よう見まねの擬洋風ではあったが、一、二階にずらりと並ぶガラス建具のアーチ窓が四国の片田舎では余程珍しかったのか、大層な評判となったらしい。以後宇和盆地ではそのアーチ窓が流行した形跡もいくつか残っている。兎角流行は見た目ではやり、それがまた時代の風となって次第に定着する好例でもある。

さて、比較的これまでの開明学校はその建設時のエピソードや貴重な掛け図などの教育資料に目が向けられていて、肝心のそこからどんな人材が育ったかについてはあまり聞いていない。大人気の明治の授業など、理想的な保存利活用の努力がなされる中で、今後はそうした人材輩出の分野にも光が当たり、解明されてゆくことが待たれる。